

## 平成18年度第二回関東地域アライグマ防除モデル事業調査検討会議事概要

◆ 日時：平成19年3月29日（木）13:30～16:00

◆ 場所：ラジオ日本クリエイト A会議室

◆ 出席者

### <委員>

安藤 元一（東京農業大学助教授）

池田 透（北海道大学助教授）

石井 信夫（東京女子大学教授）

金田 正人（生物多様性 JAPAN、三浦半島自然誌研究会）

山口 千津子（日本動物福祉協会動物担当）

### <関係機関>

農林水産省関東農政局

神奈川県環境農政部緑政課

葉山町福祉環境部環境課

逗子市環境部緑政課

相模原市環境保全部みどり対策課

東京都環境局自然環境部計画課

東京都産業労働局農林水産部食料安全室

東京都農業振興事務所振興課

東京都多摩環境事務所自然環境課

町田市環境・産業部農業振興課

### <オブザーバー参加>

群馬県環境・森林局自然環境課

山梨県森林環境部みどり自然課

静岡県環境森林部自然保護室

生物多様性センター調査科

（財）自然環境研究センター

村上興正氏（近畿地方アライグマ防除モデル事業調査検討会座長）

### <事務局>

環境省自然環境局野生生物課

関東地方環境事務所野生生物課

（株）野生動物保護管理事務所

## ◆ 議事概要

### <相模原・町田モデル事業について>

資料1でモデル事業の結果を説明。

#### ○ 委員・関係機関からの主な意見等

(★委員発言、・関係機関からの意見質問、→事務局回答)

・住民の意識を上げないと効果的な防除ができないという事務局の意見はそのとおり。相模原市は市民にPRしながら進めていく。

・町田市は農業振興課と環境保全課と連携をとりながらPRを進めたいが、市独自で捕獲する準備は整っていない。

→町田市内ではアライグマが生息しても被害の認識をもっている農家の方は少ない。農家の方と協力していくよりも保全活動をしている方と連携して進めていくほうがいいようだ。来年度はその方面から進めていきたい。

★相模原・町田モデルの事業の目的のひとつは、市町村間の連携である。今年度はそこまで至らなかったが、来年度、相模原市では住民意識の高揚を促す施策を実施するとのことであり、それを町田市へ情報提供していけるようなパイプ作りを事業に盛り込んでほしい。

### <逗子・葉山モデル事業について>

資料2でモデル事業の結果と分析結果を説明。

#### ○ 委員・関係機関からの主な意見等

(★委員発言、・関係機関からの意見質問、→事務局回答)

★ 錯誤捕獲が少ないというエッグトラップに関心がある。エッグトラップと箱ワナの評価を、来年度作成するマニュアルに盛り込んでいただきたい。

→エッグトラップは、関西地方で実験をしたが、汎用的に使えるかどうかは別の問題がある。エッグトラップが適切かどうかは環境省の鳥獣保護業務室が検討中である。マニュアルに掲載できるのはモデル事業の中での結果だけである。

・ モデル調査地でアライグマの取り残しがあつたとの報告が前回の検討会であつたので、神奈川県ではモデル調査地の内側のエリアで3月に捕獲を実施し、7頭捕獲した。来年度以降このエリアでモデル事業を行う際には、県の結果を提供したい。

★ 捕獲効率が高かったのは捕れやすいだろうと思われる場所にワナを設置したため。エサは、ドックフードとスナックパンが中心。エサの撒き方やワナの設置場所によって効率が上がったように思う。

★ エッグトラップで捕獲された場合、かなり暴れると思うが、これまで骨折をした個体はいなかったか。また混獲された場合の危険性はどうか。

→骨折が疑われる個体は1頭だけいた。獣医大学で見てもらったが、レントゲンで調べたわけではなく、確認できなかった。アメリカのエッグトラップ社では、数千例の捕獲で骨折は一例もないということだった。エッグトラップのワイヤーが長いと

けがをすることが多いので、短くした方がいい。また逗子葉山モデル事業では混獲は皆無だった。

→関西のモデル事業でもエッグトラップを使っている。エッグトラップ社は安全性については非常に綿密な試験を行っており、アメリカの獣医師会から危険性の少ないワナとしてのお墨付きはもらっている。肉の厚い手のひら部分を捕まえるため、骨を直接傷つけることがあまりなく、関西でも骨折はなかった。ワイヤーが長いとけがをすることがある。カメラで確認しても、けがをした場合は捕獲から30分以内に出血しており、見回りを頻繁に行っても事故を防ぐことは難しい。

★ 北海道でもエッグトラップを使用しているが、今のところケガはない。逆に箱ワナで捕獲した個体が手に擦り傷を作る場合の方が、多いくらいである。エッグトラップの難しい点は、捕まえてからの固定方法で、捕獲後いかに沈静化させるかは、別途考えるべき問題である。

★ エッグトラップによるカラスの混獲が一例あった。しかし箱ワナの混獲に比べると極めて少ない。いずれにしても、法定猟具として認める前に、もう少し実際の例数を見て、それに基づいた上で適しているかどうかを判断すべきである。必ずしもエッグトラップ社が言うほど安全であるとも思えないし、トラバサミやソフトキャッチほど危険でない気もしている。

→補足だが、動物園で実験した結果、サルが混獲される危険性はあるということだけ、ご注意いただきたい。

★ 事務局に確認だが、エッグトラップの評価をこの事業の中ですることになっているか、あるいはする予定があるか。

→エッグトラップについては、使用したという事実のみの報告で、エッグトラップが良いかどうかということまでは検討するつもりはない。

★ せっかくエッグトラップを使用しているのだから積極的に評価をしないにしても、マニュアルには何らかのかたちで盛り込む必要あり。

除去法を使って3週間で生息数を推定するのは無理な結果だが、3週間以降は2種類のワナを使いエサも変えているため、そのままでは使えない。ただし、元データはどこかに取っておき、実際よりも少なく出てしまう理由を検討していただきたい。難しいが、3週間以後も捕獲し続けたデータを見ながら、取り尽くせなかった原因を考えていただきたい。また、沢と尾根の捕獲率の違いがはっきり出ているので、おそらく検定をかけると出てくるだろう。

★ ネズミなどでは周りで多く捕まる「周辺効果」があるが、この場合はそのような結果が出ていないのはなぜなのか、みんなで考えたい。このデータは、もう少しいろいろな分析ができるだろう。この時間での議論はここまでにするが、いろいろな結果が読みとれる貴重なものだと考えている。以上の指摘したポイントを、もう少し確認してみたい。

## <来年度モデル事業について>

資料3および防除モデル事業フロー図を説明。

### ○委員・関係機関からの主な意見等

(★委員発言、・関係機関からの意見質問、→事務局回答)

★ 防除マニュアルのターゲットは、自治体なのか、さらにもう少し小さなエリアを想定しているのか。

→地方自治体をメインに考えている。

★ マニュアルは、関東は関東、関西は関西として、事業別に作るのか。本当のマニュアルは、そのあとに全国版のようなものができるのか。

→当初は事業地域ごとにマニュアルを作れば活用できると考えていたが、かなり地域ごとに状況が違うということと、自治体ごとに取り組み方や社会的な背景も違うため、全体的に使えるような基礎的な情報と、捕獲やモニタリングのガイドラインのようなものは、全国的なものを作っておく必要があると考えている。ただ、現場業務は進行中のため、全部まとまってからということではなく、来年度から着手するということを考えている。モデル事業の成果は、モデル事業ごとにとりまとめることが望ましいと考えている。

★ この事業で実際にマニュアルを作ってみて、そのあとにどんなものが必要か、検討する上でまた変わってくる可能性がある。

・前回の検討会で、全国でアンケート調査をするという話があったが、その状況をお聞かせいただきたい。

→生物多様性センターが今年度からすでに始めており、モデル事業でアンケート調査を実施した関東地区と近畿地区等は除き、その他の地域を対象に行った。1月に全国1200市町村にアンケート調査票を送り、現在回収した結果の集計をしている最中である。近日、全国分布が確定する予定である。

★ 来年度の事業についてだが、高密度分布地域と低密度分布地域は、今年と同じ内容を繰り返す予定か。足跡トラップや自動撮影カメラを併用するとすると、今年とどのような点でさらに工夫してステップアップしていくのか。

→高密度地域については、去年は等間隔で箱ワナを設置したが、沢の方が捕獲効率が良いため、そちらに重点的に設置していきたい。低密度地域については、今年並みの作業ができればよいと思っており、作業内容はほとんど同じと考えている。ただ、プラスとして地域間の連携が盛り込まれる。

★ 捕獲に入る前の生息状況をつかんだ上でどの程度捕ったか、という調査がやられていないため、箱ワナとエッグトラップの捕獲効果を評価できない。できれば捕獲する以前の状況をつかんでから捕獲し、最後にまたどの程度生息状況が変動したのかを確認できる調査を実施して欲しい。

→ ご指導いただいたように、モニタリングー捕獲ーモニタリングというような形で、予算の範囲内で努力したい。

- ★ マニュアルを作る際に、ワナの設置方法についての議論もされると思うが、個人の力量に頼る面が多い。またエサはわなの中よりも外に撒く方が効果がある。北海道では、アライグマは触覚が一番発達しているということを利用して、えさを触らせてワナまでおびき寄せる方法を考えている。そのような仕掛け方の工夫が必要。また、アライグマは水辺ではなく水の中を歩く。よって、撒き餌は水の中に残るものがよい。乾燥トウモロコシがいいが保管の問題と費用的な問題で、現在はドッグフードで代用している。そのような細かい工夫についても各地から情報を集めたほうがよい。
- ★ マニュアルを作るということを強く意識した調査をしてほしい。今までの結果の整理をし、足りないことがあれば来年度は追加調査が必要であるため、そのような計画を立てて欲しい。詳細計画についてどこかで議論する必要あり。どの時点で会議を開催し、どの時点でマニュアルのたたき台を作るというスケジュールが気になる。→来年度は8月に検討会を予定している。その前にワーキンググループを開催するかもしれない。
- ★ 平成19年度の課題のひとつとして、広域連携の話があがっているが、これまで具体的にどうするかという話に繋がっていない。特に自治体の連携がないことには前に進まない。ぜひ、広域的な防除の考え方の整理についても進捗が見られるような配慮をお願いしたい。  
→広域連携は来年度の事業フロー図でも強調している重要事項であるため、十分に配慮したい。
- ★ 自治体連携を進めるためには、ここにお集まりいただいてない部署に住民からの情報が集まっている場合もあるので、関係のありそうな部署をまずピックアップし、具体的にどのように連携していくべきか、関係者連携の理想図を作成して示すとよい。来年度については、もう少し詰めて議論する必要があるが、本日の議事はこれで終了としたい。

閉会